opusdei.org

福者アルバロの生涯 (2)

9月27日の福者アルバロ・デル・ポルティーリョの列福記念日にあたり、福者の伝記から青年期時代のエピソードを紹介します。

2016/09/26

『オプス・デイ属人区長・アルバロ・デル・ポルティーリョ司教の思い出』、青年期(本書第三、四章より)*

ドン・アルバロが学校の思い出を語る 時は、多くのよき先生たちへの感謝 の言葉がいつもその口から溢れ出ま した。彼らは、質の高い教育と洗礼 で受けた信仰を実践することを教え てくれたのです。ドン・アルバロの 恩師の一人が、エドワルド・コテロ 先生です。この教師は1900年代の最 初の30年間に、スペインで広く採用 された書き方の教科書と練習帳の著 者でした。後になって、聖ホセマリ アもその練習帳を使っていたと知っ た時、ドン・アルバロは喜んだもので す。

ピラール小学校に通っていた1921年5月12日、アルバロは初聖体を受けました。その時からアルバロはしばしば聖体を拝領するようになりました。その当時、聖体拝領のためには、前の晩から断食を守る義務がありました。学校では毎日ミサがあり、参加は自由でした。ご聖体を拝領するためには、朝食抜きで学校に

行かねばならなかったので、ミサが終わってから、紙に包んでポケットに入れていた朝食を食べていました。

青年期のアルバロを知る人たちは、 彼の性格として、何年たっても変わ らない自然さ、親しみ易さをあげて います。彼らは、その後、技師、司 祭、司教と身分を変えていくアルバ 口と付き合ったのですが、その変遷 にも関わらず、いつもかつてと同じ 付き合い方、同じ包容力、同じ友情 を彼に見るのでした。ドン・アルバロ の外見は、若い頃から温かくて親し みやすく、魅力的だったようです。 後にマドリード大司教になるアンへ ル・スキア枢機卿は、1938年に初め てアルバロを知った時の印象を「優 雅で感じのよい若い学生」と記憶し ています。そして、「骨の髄から善 良で、会話においては親しみ易く、 とても思慮深く闊達でした。彼と 会った時はいつも、私も喜びに満た

されましたよ」と言い添えていま す。

何年もの間、夏は、ラ・グランハで 過ごしていました。あれから何十年 も経った後、聖体について話してー もと、ドン・アルバロはカスティー リャ地方の日没に触れています。 れはきっと、子どもの頃の避暑地で 見た風景、また後に同じ山脈の麓に 位置するモリノビエホにオプス・ディ 創立者と一緒に行った時に再び目に した風景が目に焼き付いていたので しょう。

「あの地方の平原は果てしなく広大 で、遙か彼方からも日没を臨むこれ ができました。太陽が地平線に触れ るかと思える時、空全体が真っ赤放 シまり、太陽は様々な色の光線を放 ち、さながら大火事が起こったよう でした。しかし、それは光の屈折に よる効果で、太陽は実際地面に触れ るわけではありません。それに反し て、太陽よりも遥かに強力な、太陽 の中の太陽である聖体の主を頂く 時、主は私たちの魂と体に触れては ださるのです。その瞬間、どれほとな 位大なことが起こって始によので うか。キリストとの接触によが たちの魂にはどれほどの炎が燃え上 がるのでしょうか。恩恵は魂をど がるのでしまっているのでしょう か。ように変化させているのでしょう か」。

たが、その仕草に彼の知的水準の高 さを感じたものです。

アルバロは、その性格にふさわし く、スポーツマンでもありました。 ハビエル・エチェバリーア師が、あ るインタビュー記事の中で語ってい ます。ドン・アルバロは、「水泳、 ホッケー、ジョギング、テニス、馬 術、サッカーをしていましたし。ホ セマリア・エルナンデス・デ・ガル ニカによると、マドリードのピラー ル小中高等学校で学んでいた頃、 「クラスのサッカーチームの中で、 アルバロは相手チームのフォワード にとって大きな脅威となる、タフで 紳士的なディフェンスだった」ので す。1939年、軍隊でアルバロと一緒 になった者たちは、彼は乗馬がとて も上手だったことを覚えています。

弟のカルロスが語るところによれば、1930年代、アルバロは写真に 凝っていました。被写体に選ばれた 兄弟たちに、様々なポーズをとらせ、撮影中は動かないようにと口を酸っぱくして注文を付けていたアルバロの姿を生き生きと再現してくれました。結果は、当時のカルロスにとっても驚くような出来栄えだったのです。

ドン・アルバロの家族が、代々、闘 牛の愛好家であったように、彼も若 い頃から闘牛が好きでした。オプス・ デイのメンバーになる前、アルバロ は友人たちと一緒に子牛を使った闘 牛をするために小さな闘牛場を借り ていたこともありました。成人して からも、有名な闘牛士のことをよく 覚えていました。日常の会話で闘牛 の用語を使うこともありました。ス ペインでは比較的よくあることで す。ドン・アルバロが闘牛に興味を抱 いていたこと、また、日々、多くの 仕事と《格闘》していることをよく 知っていた聖ホセマリアは、1949年 頃に、1冊の『道』にドン・アルバロ

のための次のような献呈の辞を書きました。「神に仕えるため、多くの 闘牛をこなさなくてはならないよ。 私の息子アルバロへ」。

* 『オプス・デイ属人区長・アルバロ・デル・ポルティーリョ司教の思い出』。サルバドール・ベルナル著、中島貴幸監修。2014年6月25日発行。A5サイズ、389頁。

非売品ですが、協力金として一冊 1,800円にてお渡ししています。ご関 心のある方は、上記「連絡」よりE メールにてお問い合わせください。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/fukusha-alvaro-2/ (2025/12/19)